

平成29年 『私たちの平和宣言』

平成29年8月6日 広島

あの夏の朝、瞬きのうちに、巨大な灼熱と暴風の塊が私達の故郷を飲み込みました。その時を、5千メートルの上空で一機の日本の戦闘機が体験していました。「広島^{まちな}の街並みを見た直後、突然^{しゅうげき}の衝撃で機体は飛ばされた。必死に機体を立て直して地上を見たら・・・街が無い！瓦礫^{がれき}しかない！」・・・と。幾万の同胞たちが街もろとも抹殺^{まつせつ}されていました。そして3日後の長崎もまた無残な姿になりました。

あれから72年。私達から2つの大切な事実が忘れ去られようとしています。その一つは、原爆に先立ち10万人が犠牲になった東京大空襲の目標が、軍事施設ではなく「東京市街地」だと明記されていたことです。原爆も、全国各都市の空襲も、明記された通りに、普通の市街地が標的になり、“幾十万もの無辜^{むこ}の人々が折り重なる殺戮^{きつりく}”の現場になりました。もう一つは、決して、かの国の前大統領が述べたような、「雲一つない明るい朝、空から死が落ちてきた」のではなく、原爆という「死を落とした人の手」があったことです。逃げ惑う子供達にまで、低空から機銃掃射をした多数の敵戦闘機もまた、「死を落とした汚れた手」だったのです。「戦争は軍人と軍人の戦いだから原爆は戦争ではなく、非戦闘員を殺す虐殺^{ぎやくきつ}」でしかありません。戦争中であっても、人々には日々の営みの場があり、そこは攻撃してはならないとする国と国との約束がありました。しかし、躊躇^{ためら}うことなく虐殺^{ぎやくきつ}は実行されました。焦熱^{しやうねつ}は人間を焼き尽くし、閃光^{せんこう}は影だけを石に焼き付け、爆風は建物を壊してもろともに人を砕き、ガラスは無数の弾丸となって肉体に刺さり、死なずとも肌は焼け、あるいは溶け落ち、破片は肉に食い込みました。人間の想像したどんな地獄^{じごく}絵よりも残虐無比な惨状^{ざんぎやくむひざんじやう}には、表現する言葉すらありません。私達はここに改めて、皆様の無念の最期を想い、魂の安らかならんことを祈ります。

街は消え、遠くまで見渡せる音のない灰色の世界で、辛くも生き延びた人々は彷徨^{さまよ}いました。死んだ子を背負う母や眼球が飛び出た人、黒焦げの負傷者を乗せたりアカー。爆心地から逃れ、黒く変色した人々の列は続きました。人々は無言で、前だけを向いて歩きました。しかし、その姿がいかに悲惨であっても、その歩みは、残された自らの力だけで踏み出した、明日に向かう偉大な一歩だったのだと思えてなりません。達者な者は救護に当たり、医師や看護師は懸命の治療^{ちりやう}を施し、犠牲者を探して助け、骸^{なきがら}を茶毘^{だび}に付し、動員学徒は不眠不休で電車を復旧させ、水道局の人々は破壊された浄水場のポンプを修理して被災者に水を届けました。長崎では必死の作業で鉄道線路が復旧され、一番列車が救助に向かいました。これらは皆、生き残った人々が死体と

一緒に過ごした数日間の、色も音もない世界に^{よみがえ}蘇^{ふっこう}った復興^{ごうほう}の号砲でした。原爆は街と人の体を壊したけれど、心までは壊せませんでした。人々は再び生活を始め、手に入る物を買い、家を建て、驚異的な速さで廃墟は街に変わって行きました。私達の幼い記憶には、破壊された建物の鉄骨を修復する人々、道路を再建する人々、相協力して地域を整える隣近所の人々、そして子のために遊具を作る隣のおじさんやおばさんが居ました。それが私達の親や祖父母達の姿でした。現在の街が美しく整えられ、有機的に結合し、不足のない品物の数々を見るにつけ、あの時の皆様の懸命の努力に対して深い感動に満ちた感謝の気持ちが沸き上がります。本当にありがとうございました。そして私達は、皆様の偉大な成果を守り、発展させるべく今という時間を生きています。我が子を、我が故郷^{ふるさと}を、そして我が国を再び蹂躪^{じゅうりん}させないことは、私達の大きな責務^{せきむ}です。

今年、北朝鮮はミサイルと核兵器の威力を急速に向上させ、日本も無差別核攻撃^{むさべつかくこうげき}の対象だと恫喝しました。中国は「核兵器は中華民族^{ちゅうかみんぞく}の尊厳^{そんげん}」だと主張しています。さらに仲裁裁判所の裁定^{ちゅうさいさいばんしょ}は紙くずだと罵^{ののし}って南シナ海の人工島を着々と要塞^{ようさい}に変貌させ、周辺国や我が国を軍事的に威圧^{いあつ}しています。

「核廃絶^{かくはいぜつ}」をうたいあげれば危機は解消するでしょうか。オバマ前大統領は「あらゆる選択肢^{せんたくし}を排除しない」と警告しつつも、彼の「戦略的忍耐^{せんりやくてきにんたい}」は、北朝鮮の核開発を放任しました。「粘り強く対話し不正^{ただ}を糺す」政策は失敗しました。トランプ大統領はオバマ前大統領と同じく「全ての選択肢はテーブルにある」と言いつつ、日本海に艦隊を派遣しました。そして、艦隊のある間、北の暴発^{ぼうはつ}は一時的にせよ縮小しました。今年の7月、国連総会で「核兵器禁止条約^{かくへいききんしじょうやく}」が採択されました。しかしながら、核保有国のどの一つとして条約に同意せず、同意した122ヶ国中の102ヶ国は北朝鮮と国交がある国々です。それらの国々が、これまで北朝鮮の核廃絶を実行させる力を発揮したことはなく、条約は加盟国だけを縛ります。条約を後押しした平和首長会議、そこに参加する核保有国の都市もまた、自国の核兵器を制限させたことはありません。この現実から、私達は条約に実効性はなく、歓迎もせず、日本の不参加は当然だと考えます。なぜなら、我が国は国民の平和と安全を守るため、核保有国との連携を含むあらゆる手立てを尽くして核兵器による惨禍を防ぐ立場を取る責務があるからです。「核廃絶」、私達はその美しき願望を否定はしません。しかし、我が国の現在は近隣諸国の核兵器抗争^{ただなか}の只中にあり、「核兵器禁止条約」では目の前の危機を排除できません。かつて、いわゆる「被爆者代表」が日本国憲法の独特の解釈を根拠に首相に対して我が国の防衛政策の撤廃を要求しましたが、それが金正恩氏の行動を抑制したでしょうか？ オバマ前大統領主導の「イランとの核合意」は、一定期間の核開発凍結など甘い合意だったので、専門家の予測通り、サウジが反発して湾岸諸国はイランとカタールとの断交に踏み

切りました。性急な^{きれいごとがいこう}綺麗事外交が^{わな はま}罠に嵌る实例です。日本の危機が現実になった今、核兵器にこだわるあまり、私達は反核平和主義を掲げて現実逃避の外野の観戦者となってはならず、国際法の認める抑止力の保持までも否定すべきではありません。安全無くして平和はない、厳しい国際政治の現実の中で、広島も、日本各地も、理不尽な攻撃を抑止する手段を備え、住民の安全を守る行政こそが最優先されるべきなのです。私達は、「反核平和」の矛盾を見据え、実効的な平和実現の道を求め、渾身の力で復興された偉大な先人の遺産を守る決意です。未来を託す子孫のために、そして「過ちを繰り返えさせないために」。

「平和と安全を求める被爆者たちの会」 <http://www.realpas.com/>